

2001年8月のある日、私は南塬村の少女たちの写真を懐に村を訪ねますと、子供たちが村はずれの胡桃の老木の下の窑洞の前に案内してくれました。つまり此处が亚亚の家というわけです。彼女のお母さんが「娘は畑へスイカの見張りに行ってるよ」と畑の方向を指差しました。私はお母さんが指差した方向に向って、腰の高さほどに伸びたトウモロコシ畑まで来ますと、遠くに草葺の掛け小屋らしいものが見えます。近寄って見ますと、四本の丸太を支え棒にした三角形の掛け小屋風の棚で、真ん中に何枚かの板を渡し、両脇はぼろ布と草で焼け付く太陽の陽射しを遮っています。中で女の子と女の子より小さい男の子が座って本を読んでいました。同行の少女が、この女の子が、写真を撮ったとき胡桃の木の下で立っていた亚亚だと教えてくれました。当時、女の子はカメラの前でとてもはにかんだきまり悪そうな様子で、その場のひょうきんな男の子たちと対照的でした。けれども今の亚亚は写真を手にし、笑い喋り、顔立ちも以前よりずっと器量よしになっていました。弟の東東もウサギのような歯をむき出して無邪気に笑っています。

厳しい陽射しの下、スイカ畑の中の掛け小屋を時折熱風が吹き抜けて行きます。小屋の周り是一片緑の西瓜畑で、畑のあちこちにまだ熟していないスイカが転がっています。畑の掛け小屋で宿題をしている姿は、はるか過ぎ去った子供のことを思い出させ、なんともいえぬ感慨を呼び起こす特別な詩情があります。私はそんな気持ちに駆られ、ちびっ子姉弟が小屋の中で勉強に励んでいるところや瓜畑にいるところを何枚かカメラに収めました。

母親もいつの間にか来てましたので、「亚亚は本当にいい子だね。こんなに小さいのにもう大人の仕事を手伝えるんだね。」と褒めて言いましたが、母親は聞き流して「あの子達はしぶしぶやっとな瓜畑に来たんですよ。窑洞の中にいるほうが涼しいって…。」「そうなの？」私が亚亚の方に顔を向けると、くっ、くっ、くっとな銀の鈴を振るような天真爛漫な笑い声が返って来ました。

何日かして、私は又南塬村を訪ねました。知り尽くした道を辿って村はずれの亚亚の西瓜畑の掛け小屋に行きますと、亚亚は丁度遊んでいて、父親とお姉さんも一緒にいました。私は彼らを一緒に写真を撮った後、ついでに別

のところの撮影に行くことにしました。今日は畑は大人の目があるので、亚亚は自分の好きなように時間を過ごしてもよいでしょう、畑の間をびよんびよん跳ねながら私についてきて、時折私の小さなモデル役を務めてくれました。トウモロコシ畑や、スイカ畑での撮影で人影が欲しいと思う時、亚亚を手招きすると小鳥のように喜々と畑の中に跳んで行って、私の望むままポーズをとってくれます。道すがら摘んだ野菊の花を手の上機嫌で私のカメラのレンズに飛び込んできたときは、一幅の絵画を感じさせる作品になるに違いないと素早くシャッターを押しました。

歩きながら亚亚とお喋りしました。このあたりの子どもたちが遠くに行く機会はありません。私が亚亚に延安に行ったことがあるか訊ねますと、もう、三回も行ったといいます。それで、お姉さんや弟も行ったことがあるかどうか訊ねますとそれはないとのこと、不思議に思っ、「お父さんは亚亚を一番可愛がっているの？どうして、亚亚だけを延安につれて行くの？」と訊きました。亚亚は頭を傾げて言いました。「私を延安に連れて行くのは病院に行くためなの、目を見てもらうため。」この時になって、私はやっとな彼女の左目が少しおかしいことに気がつきました。寄り目のような、斜視のような、道理で亚亚と接していてもなにか落ち着かない感じがしていたのです。しかし、亚亚の笑顔があまりに天真爛漫なので、その感じがどうしてなのかあまり深くは考えていませんでした。

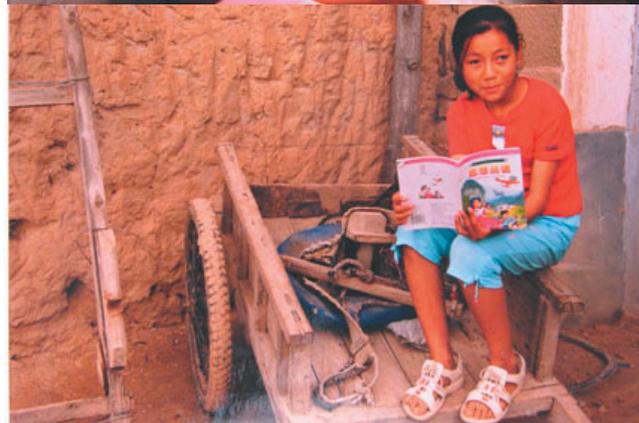
陕北の農村の子どもたちは、滅多に村の外へ遊びに連れて行って貰う事はありませんし、まして夏休みのキャンプなどは言うまでもありません。外出などは治療のためぐらいです。私は仔細に彼女の目を見ると、「この目は生まれつきなの。ものを見るのには困らないわ。」と真面目な顔で言いました。

その後、私は数回、南塬村に行きました。学校に行く途中や、放課後の帰り道、畑にいるときとか、同級生と

一緒だったりの偶然の出会いがあり、いつも必ず亜亚をカメラに収めました。ある時などは瓜畑の掛け小屋の前で、亜亚と遊びに来ていた他の二人の同級生が私を見かけ、自分たちの方から「写真を撮って」と呼びかけて来ました。私は当然ながら喜んで彼女たちの希望を叶え、亜亚というこの国語係りの小組長の面子を同級生の前で立ててやりました。何日かして、「友達は写真気に入った?」と、亜亚に訊ねますと、「まだ、他にも写真を撮って欲しいって人いるよ。」という答えでした。

2003年4月、サーズのため、陝北での二年にわたる仕事に終止符を打つのを遅らせました。この期間を利用してもう一度、ずっと撮影し続けて来た何人かの少女たちに別れを告げようと南塬村へ行きました。村はずれの、菜の花がいちめんに咲く畑に亜亚を立たせ広角レンズでその風景を撮影しました。空は晴れたり曇ったり、光が射して明るくなったり陰になったりですが、少女たちはいつもよりぎこちなく喋りもしないでいます。私は彼女たちに、今日の写真は多分一年経ったら届けに来るよと伝えました。彼女たちは皆分かったと頷き、最後に村の入り口まで送ってくれました…。

2004年7月、私は又南塬村に足を踏み入れました。一年以上の間に、学校を退学したり、父母と一緒に一家全員で他所へ引っ越してしまっている少女もいました。しかし、亜亚は変わりなく、私を見ると相変わらずの天真爛漫な笑顔で迎えてくれました。窑洞に入ると丁度頭よ



り大きなドンブリを抱えてご飯を食べているところでした。私が、「一回の食事にずいぶん沢山食べるんだねえ」と言うと、相変わらずの銀の鈴を振るような笑い声が返って来ました。

